

農業ガイド1015号

2015年7月4日

清水・メロディーファーム 全国豆類経営改善共励会で農水大臣賞

病害予防し高収量を実現



全国豆類経営改善共励会で農水大臣賞を受賞したメロディーファームの十川社長（左）と谷口登記夫専務（右）、中央はあべ俊子農水副大臣

【清水】第43回全国豆類経営改善共励会で、清水町の農業法人メロディーファーム（十川隆好社長）が、小豆・いんげん・落花生等の部で最高賞に当たる農林水産大臣賞を受賞した。同社では近年の温暖化に対応した肥培管理で倒伏を抑え、長期輪作で病害を予防して高収量を実現した。

同共励会は全国農業協同組合中央会（ＪＡ全中）などが主催。1972年度から毎年開催され、豆類の生産・経営で、先進的な農家や生産集団を表彰している。①大豆経営②大豆集団③小豆・いんげん・落花生等一の３部があ

り、今年は計５団体・生産者が農水大臣賞に輝いた。表彰式は６月17日に東京都内で行われた。

メロディーファームは96年に設立され、４戸の農家で構成する複数戸法人。約210ヘクタールを経営し、豆類の他、小麦、ジャガイモ、ビートも作付けする。小豆は毎年10～15ヘクタールほどを作っている。

小豆の品種は全て「エリモショウズ」。実需側からの要望は高いが、病害に弱いため、作る農家は少なくなっているという。同法人でも設立以前は別の品種主体だったが、複数戸で大規模経営することで、７年以上間隔を空けた長期の輪作が可能になり、栽培を再開できた。

近年は５～７月の高温で生育が進みすぎ、収穫前に倒れて品質が低下することがあった。このため、施肥量を減らして地域の平均の1.4倍程度に当たる10アール当たり390キロを収穫し、製品率も高かった。

十川社長（57）は「来年は法人設立から20周年を迎える。今年も風の被害を受けるなど天候の影響はあるが、高品質な小豆を作っていきたい」と話している。

農業ガイド1018号

2015年7月25日

十勝農業賞（農業者部門）丸山氏、佐藤氏受賞

十勝の農業発展に貢献した生産者と指導者を顕彰する「第38回十勝農業賞」（十勝農協連主催＝6月22日表彰）は、農業者部門で２人が受賞した。受賞者の功績を紹介する。

丸山馨さん（59）＝池田・畑作

ツクネイモ生産確立



池田・高島地区の名産となっている「ツクネイモ」の導入と生産確立に尽力した丸山さん

「この土地に入植した先祖や、家族、地域などのつながりがないと、今ここで営農することができなかったと思う。それだけに、周囲の人たちに感謝したい」と受賞の喜びを語る。

1956年、池田町生まれ。旧高島中学校、池田高校を卒業後は日本大農獣医学部に進学し、土壌学などを学んだ。大学卒業後の24歳で就農。現在は、畑作32ヘクタールで経営している。

学生の頃から、有機農業や自然農法などに興味を持

ち、就農し30代に入ってから自分で土壌分析をするように。池田町高島地区でジャガイモ種イモ全量を供給する採種組合にも携わり、優良な無病種子の生産・普及にも尽力する。

また、1998年ごろからは、ＪＡ十勝高島の八木英光組合長と共に、今では同ＪＡの名産となっているツクネイモの導入を手掛けた。ナガイモに比べて浅い場所に実るため収穫作業の効率化が図れ、高級和菓子などに使われるなど付加価値が高いと判断した。

ツクネイモ生産には、積算温度の確保など高島地区の地の利が生きたが、京都の老舗菓子店が要求する水準に合わせて生産するには苦労も。「10年ぐらい試行錯誤した」と振り返りつつ、「大変だったけど、新しいものを作るのは面白い」と笑顔を見せる。

昨年には長男（25）が就農。「後継者ができたので興味をなくさないよう、今後、植物の組み合わせで虫を寄せない農法などを試したい」と意欲を新たにしている。